

平成22年7月の解説（週間天気予報）

【7月の天候状況】

上旬は、梅雨前線が本州南岸に停滞することが多く、北日本へも暖かく湿った空気が流れ込んだため、全国的に曇りや雨の日が多くなりました。また各地で大雨となった所がありました。中旬は、中頃まで梅雨前線が本州付近から日本海に停滞し非常に暖かく湿った空気が流れ込んだため、東・西日本では大雨となり、浸水害や土砂災害が発生したところもありました。その後は、高気圧に覆われ晴れて気温が上がりました。北日本では、気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなりました。沖縄・奄美は高気圧に覆われ晴れる日が多くなりました。下旬は、東・西日本は高気圧に覆われ、東日本を中心に最高気温が35以上の猛暑日となるなど各地で厳しい暑さが続きました。北日本では、気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなりました。沖縄・奄美は湿った空気が流れ込んだため、曇りで雨の降る日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、東日本では平年より多くなりましたが、北日本と沖縄・奄美ではかなり少なくなり、7月の月間日照時間の最小値を更新した気象官署がありました。降水量は北日本と沖縄・奄美でかなり多くなり、北海道では7月の月降水量の最大値を更新した気象官署がありました。気温は、北・東日本では平年よりかなり高くなり、7月の月平均気温の最高値を更新した気象官署がありました。西日本は平年より高くなりました。

【7月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より6ポイント高い71%でした。東日本から九州北部地方にかけて6から16ポイント高くなりましたが、沖縄地方では13ポイント低くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、関東甲信、北陸、九州地方で例年より0.5から0.8小さくなり、全国平均は例年より0.4小さい2.2でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、近畿、中国、九州北部地方で例年より0.5から0.6小さく、全国平均では0.4小さい1.4でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【9月の週間天気予報の利用にあたって】

9月になっても太平洋高気圧に覆われ、真夏を思わせるような厳しい残暑となる日があります。東京を例にとると、平年値では9月の真夏日（最高気温が30以上）が6.9日あります。週間天気予報では今年の5月27日より予想気温の誤差幅の表現を改善しました。例えば以前は「±3」とした誤差幅を「上方誤差：+3、下方誤差：-1度」のように発表し、予想される気温の分布に偏りがある場合も適正な予測範囲を提供することが可能になりました。新しい誤差幅に実際の最高気温が入る確率は約80%です。残暑に対する健康管理等に最高気温予報を利用して下さい。